レオン・ヴェルトに

読者である子どものみなさん、この本を一人の大人にささげたことを許してほしい。それには大切な理由がある。まず、この人は世界で一番の私の親友なのだ。次に、この大人は何でもわかる人なのだ、子どもについての本でさえ。そしてもう一つの理由。この人は今フランスに住んでいて、おなかをすかせて、寒い思いをしている。彼には励ましが必要だ。こういった理由でも納得してもらえないならば、この本を子どもだったころのその大人にささげることにしよう。どんな大人もかつては子どもだったのだから（とは言っても、それを覚えている人はほとんどいないのだが）。そういうわけで、この献辞は次のように修正する。

小さな少年だったころのレオン・ヴェルトに

1

僕が６歳のころ、『自然界の中で起こる本当の話』という原生林について書いている本の中に、すばらしい絵を見つけた。それは１匹の動物を飲みこもうとしている大蛇ボアの絵だった。これがその絵を写したものだ。

その本にはこう書いてあった。「ボアは獲物をかまずに丸ごと飲みこみます。するともう動けなくなって、６か月のあいだ眠りますが、そのあいだに獲物を消化するのです」

それを読んで、僕はジャングルの冒険についていろいろなことを考えた。それから色鉛筆を使って初めて絵を描き上げた。僕の絵第１号だ。それはこんなふうだった。

僕は、この傑作を、会う大人たちみんなに見せて「この絵、こわい？」と聞いてみたのだ。

すると大人たちはこう答えた。「こわいだって？　どうして帽子がこわいの？」

僕が描いたのは帽子の絵ではない。ゾウを消化しているボアの絵だ。

しかし大人たちには理解できなかったので、もう一枚絵を描いた。大人たちにもはっきりと見えるように、ボアの中の絵を描いてみた。大人というのは説明してもらわないとわからないものだからだ。僕の絵第２号はこんな感じだった。

今度は大人たちときたら、「内側だろうが、外側だろうが、ボアの絵はもう放っておきなさい。その代わりに地理と歴史と算数と文法をがんばりなさい」と言ったのだった。そういうわけで、僕は画家というすばらしい職業につけたかもしれなかったのに、６歳で画家を目指すのはあきらめた。僕の絵第１号も第２号もうまくいかなかったので、がっかりしてしまったのだ。

大人というのは自分だけでは何もわからないのだ。だから子どもはいつもいつも説明し続けなくてはならなくて、うんざりしてしまう。

そこで僕はほかの仕事を選ぶことになって、飛行機の操縦を身につけた。そしてほとんど世界中を飛び回るようになった。なるほど、地理はとても役に立っている。そのおかげで、一目で、中国とアリゾナを見分けることができるのだから。夜に迷ってしまったときには、そういう知識はとても価値があるのだ。

そうして生きてきた中で、僕は重要なことに関わっているとても多くの偉い人たちとずいぶん出会ってきた。僕はずいぶん大人たちに囲まれて暮らしてきたし、大人たちの様子を間近に見てきた。でも、大人についての僕の考えはあまり変わらなかった。

僕はいつでも僕の絵第１号を持ち歩いて、とにかくものがわかりそうだなと思える人に出会うと、本当にものがわかる人かどうかを知るために、かならずその絵を見せる実験をした。しかし、誰であれ、その人が男であろうと女であろうと、返ってくる答えは同じだった。

「それは帽子だね」

そのあとは、僕はその人にボアの話も、原生林の話も、星の話もしなかった。その人に合わせて、トランプのブリッジやゴルフや政治やネクタイの話をした。すると、その大人は趣味のいい人間に会えたと言って、大いに満足するのだった。

2

こうして、僕は6年前に、飛行機がサハラ砂漠に不時着するまで、心から話をする相手が見つからないまま、一人で生きてきた。不時着というのは、飛行機のエンジンのどこかが壊れたのだ。整備士も乗客もいないので、難しい修理を一人でやるしかないと覚悟した。僕にとっては生きるか死ぬかの問題だった。というのも、飲み水が1週間分あるかないかだったのだ。

最初の夜、人が住んでいるところから千マイルも離れた砂の上で僕は眠りについた。船が難破して大洋のまっただ中をいかだで漂流している人よりも、もっと孤独だった。だから、夜明けに、小さく少し変わった声で起こされたときの僕の驚きは想像してもらえるだろう。その声はこう言っていた。

「お願い、ヒツジの絵を描いて！」

「え？」

「ぼくにヒツジの絵を描いて！」

僕は雷に打たれたように跳び上がり、何度も目をぱちくりさせて、注意してあたりを見回してみた。すると、とても不思議な雰囲気の男の子がいて、とても真剣にこちらを眺めていた。これが、僕があとに描き上げた最高の出来のその子の肖像画だ。もちろん、僕の絵はモデル本人の魅力にはとうてい及ばない。

しかし、それは僕のせいではない。6歳のときに、大人たちに画家を目指すのをあ

きらめさせられていたので、ボアの外側と内側の絵を描いたこと以外、絵の練習はまるでしてこなかったのだから。

　さて、その子が突然現れたので、僕は目玉が飛び出るほど驚いて、その子をじっと見つめた。さっき言ったように、人が住んでいるところから千マイルも離れた砂漠に僕はいたのだから。しかし、その子は道に迷った様子でもないし、疲れ切っている様子でもなければ、おなかが減ってたまらない様子でも、のどがからからに乾いている様子でも、こわがっている様子でもない。人が住んでいるところから千マイルも離れている砂漠の真ん中で迷子になった様子などまるでないのだ。やっと口がきけるようになって、僕はその子にたずねた。

「いったい、君はここで何をしているの？」

　すると、その子は何か重要なことについて話しているかのように、とてもゆっくり繰り返した。

「お願い、ぼくにヒツジの絵を描いて･･･」

　不思議なこともあまりに度がすぎてしまうと、人間はさからえなくなるものだ。人が住んでいるところから千マイルも離れたところで、死の危険にさらされているときに、ヒツジの絵を描くなんて馬鹿げているとは思ったけれど、ポケットから１枚の紙と万年筆を取り出した。が、そこで、自分が地理と歴史と算数と文法しか勉強してこなかったことを思い出し、その子に（少しむっとしながら）絵は描けない、と言った。すると、その子はこう答えた。

「そんなことはかまわないよ。ぼくにヒツジの絵を描いて･･･」

　でも、ヒツジの絵など描いたことがなかったので、僕は自分に描ける２つの絵のうちの１つを描いてみせた。ボアを外側から描いた絵だ。すると、その子はこう言ったので、僕はとてもびっくりした。

「ちがう、ちがう！　ボアに飲みこまれたゾウなんてほしくない。ボアはすごくあぶないし、ゾウはとても場所をとるでしょ。ぼくが住んでいるところは、何もかもとても小さいんだ。ほしいのはヒツジなんだ。ヒツジの絵を描いて」

　そこで、僕はヒツジの絵を描いた。

　その子はじっくり眺めて、こう言った。

「だめ、このヒツジ、もう病気で弱ってる。別のを描いて」

僕は描きなおした。

その子はやさしくにっこりして、気づかうようにこう言った。
「ねえ、見てみて。これはヒツジでも、大人のオスのヒツジだよ。ツノがあるもの」
それで、僕はまた描きなおした。

しかし、それも前の２つと同じようにだめだと言われた。
「これは年を取りすぎ。ぼくは長生きするヒツジがほしいんだ」
僕はもう我慢の限界だった。エンジンの分解を急いで始めなければいけなかったからだ。そこでこんな絵を描いた。

そして投げやりに説明した。
「これは箱だ。君がほしがっているヒツジはその中にいるよ」
すると、この幼い審判の顔がぱっと明るくなったので、僕はとても驚いた。
「こんなのがほしかったんだ！　このヒツジ、草をいっぱい食べるかな？」
「どうして？」
「だって、ぼくの住んでいるところは、何もかもとっても小さいんだもの･･･」
「きっと草はなくならないよ。君にあげたのはとても小さいヒツジだからね」
その子は絵を覗きこんだ。
「そんなに小さくないよ･･･あれ！　寝ちゃったよ･･･」
こうして、僕はこの小さな王子さまと知り合ったのだった。

3

王子さまがどこから来たのかわかるまでには、ずいぶん時間がかかった。王子さまはかなり多くの質問をするのに、僕がたずねることはまるで聞こえていない様子だったのだ。少しずつすべてが明らかになっていったのは、たまたま王子さまが言った言葉がつながっていったからだ。

たとえば、初めて僕の飛行機を見たとき（飛行機の絵を描く気はない。複雑すぎて僕の手にはおえないから）、王子さまはこう聞いた。

「そのおかしなものは何？」

「おかしなものじゃないよ。これは飛ぶんだ。飛行機だよ。僕の飛行機さ」

自分は飛べるのだと、僕は誇らしげに教えた。

すると王子さまは大声で言った。

「えっ！　君、空から落ちてきたの？」

「そうだよ」と、僕は気弱になって答えた。

「ああ、それは笑えるね！」

王子さまはそう言って、とてもかわいらしい声で笑い出した。僕はすごく腹が立った。僕が受けた災難を、真剣に受け止めてほしかったのだ。

王子さまはこう続けた。

「じゃあ、君も空から来たんだね！　どの星から来たの？」

その瞬間、王子さまがなぜここにいるのかという不可解ななぞに、一筋の光が差しこんだ。そこで、僕はすかさずたずねた。

「じゃあ、君はどこかほかの星から来たんだね？」

でも、王子さまは答えなかった。飛行機から目を離すことなく、頭をわずかに振ってこう言った。

「たしかに、これに乗ってそんなに遠くから来られたはずないね･･･」

そうして、王子さまは考えこんだ。それは長いあいだ続いた。やがて、ポケットから僕の描いたヒツジの絵を取り出すと、その宝物をじっと眺めて物思いに沈んだ。

「ほかの星」のことが少しわかったことで、僕の好奇心がどれほどかきたてられたことか。だから、もっと知ろうととてもがんばってみた。

「君はどこから来たの。君が言っている『ぼくの住んでいるところ』ってどこなの？ヒツジをどこに連れていきたいの？」

しばらく黙って考えてから王子さまは言った。

「君のくれた箱はとてもいいよ、夜はヒツジの家として使えるもの」
「そうだね。君がいい子なら、昼間ヒツジをつないでおけるように綱もあげるよ。それから綱を結ぶ杭も」
　こう言われて、王子さまはびっくりしたようだった。
「つないでおく？　なんておかしな考えなんだ！」
「でもつないでおかないと、どこかに行ってしまって迷子になるよ」
　すると、僕の友だちはまた笑い出した。
「だけど、どこに行くっていうのさ」
「どこにだって。ずっとまっすぐ」
　すると、王子さまはまじめな顔になって言った。
「だいじょうぶなんだ。ぼくが住んでいるところは、何もかもとても小さいんだ！」
　そして、少し悲しそうに言った。
「ずっとまっすぐ行っても、そんなに遠くまで行けないんだ･･･」

4

こうして僕はとても重要な２つ目のことを知った。王子さまの故郷の星は、なんと一軒の家とほとんど変わらないくらいの大きさだ、ということだ。

といっても、僕は大して驚きはしなかった。地球や木星、火星、金星のように名前がある大きな惑星のほかに、望遠鏡でも見つけるのが難しいくらい、とても小さな星も何百とあるとよくわかっていたからだ。天文学者がそんな星を見つけても、名前はつけない。番号をつけるだけだ。たとえば、「小惑星 3251」といったように。

王子さまがやって来た星は小惑星 B612 だと思うが、それにはちゃんとした理由がある。

この小惑星を、1909 年にトルコのある天文学者が、望遠鏡で一度だけ観測したことがある。

その天文学者は国際天文学学会で自分の発見についてすばらしい発表をした。ところが、そのとき彼がトルコ風の変わった服装をしていたというので、誰も彼の言うことを信じなかった。

大人というのはそういうものだ・・・

しかし、幸いなことに、小惑星 B612 の名誉は回復されることになった。トルコの独裁者が国民に対してヨーロッパ風の服を着なければ死刑にするという法律を作ったからだ。そこで、その天文学者はとても洗練された服を着てもう一度発表した。すると、今度はみんなが彼の報告を受け入れたのだ。

僕がこの惑星についてこんなに詳しく話したり、番号まで言うのは、大人たちのふるまい方のせいだ。新しい友だちができたと話しても、大人はいちばん大切なことは聞かない。「どんな声をしている？」「どんな遊びが好き？」「チョウチョ採集をしている？」なんてぜったいに聞かない。

その代わりに、「年はいくつ？」「兄弟は何人？」「体重は何キロ？」「お父さんの給料はいくら？」などと聞く。こういった数字からでしか、大人はその子のことがわかったと思えない。

「バラ色のレンガでできたきれいな家を見たよ、窓辺にはゼラニウムの鉢がたくさん置いてあって、屋根の上にはハトが何羽もいるんだ」と話しても、大人はどんな家なのかまったくわからないだろう。大人にはこう言ってやる必要がある。「２万ドルの家を見たよ」。すると大人たちは歓声を上げて、「なんてすばらしい家なのだろう！」と言うだろう。

だから、「王子さまはとても魅力的だった、声を出して笑っていた、ヒツジをほしがっていた、それが王子さまが存在していた証拠だよ。誰かがヒツジがほしいと言うなら、それはその人が存在している証拠じゃないか」と言ってみても、むだだろう。大人たちは肩をすくめて子ども扱いするだろう。ところが、「王子さまが来た星は小惑星B612だ」と言えば、納得してあれこれ聞かずに静かにしておいてくれるだろう。

大人というのはそういうものだ。でも悪く思ってはいけない。子どもは、大人にはいつも広い心で接してやらなければならないのだ。

でも、もちろん、生きるということがどういうことかわかっている僕たちには、数字なんてどうでもいいことだ。僕はこの物語をおとぎ話のように始めたかった。こんなふうに。「むかしむかし、小さな王子さまがおりました。その王子さまは自分よりほんの少しだけ大きい星に住んでいました。そしてヒツジをほしがっていました・・・」

生きるということがどういうことかわかっている人には、このほうがはるかに本当らしくなっただろう。

というのも、僕はこの本を軽々しく読んでほしくないからだ。こうして思い出を書きとめるのも本当につらい。僕の友だちがヒツジといっしょに去ってしまってから、もう6年にもなる。ここに彼のことを書こうとしているのも、彼を忘れないようにするためだ。友だちを忘れてしまうのは悲しむべきことだ。誰もが友だちを得たことがあるというわけではないからだ。そしてもし僕が彼のことを忘れてしまうと、僕はもはや数字にしか興味がない大人のようになってしまうかもしれないからだ。

だからこそ、僕は絵の具箱と数本の鉛筆を買ったのだ。僕の年齢でまた絵を描き始めるのは大変なことだ。なにしろ6歳のときから、ボアの外側とボアの内側以外の絵は一つも描いたことがなかったのだから。もちろん、できるだけ実物に近いものを描こうと思う。しかし、うまくいくかどうか、まるで自信がない。1枚の絵がまあまあうまく描けても、次の絵は似ても似つかないものになる。王子さまの背の高さも少し違って、あるところでは背が高すぎたり、また別のところでは背が低すぎる。それに、王子さまが着ていた服の色にも自信がない。そんなわけで、うまくいったりいかなかったりしながらもせいいっぱいやってみるが、なんとかそれらしいものになってほしいと思っている。

どこかもっと大事なところでも間違えてしまうかもしれない。でも、僕が悪いのではない。僕の友だちは何も説明してくれなかったのだから。たぶん僕も自分に似ていると思っていたのだろう。けれども、残念なことに、僕には箱の中のヒツジを見る目がない。たぶん、僕は少し大人たちに似ているのだろう。そうなる必要があったのだ。

5

毎日話をするうちに、僕は王子さまの星のことや、王子さまがその星を出てきたこと、王子さまが旅をしていたことなどを知るようになっていった。王子さまの考えていることが、ふと言葉に現れるにつれて少しずつわかってきたのだ。そんなこんなで３日目にはバオバブの恐ろしい話を知ることになった。

これもまたヒツジのおかげだった。というのも、不意に王子さまがひどく心配そうな顔をして、こう聞いてきたからだ。

「ヒツジが小さな木を食べるって、ほんとだよね」

「うん、ほんとうだ」

「ああ、よかった！」

ヒツジが小さな木を食べるのがなぜそんなに大事なことなのか、僕にはわからなかった。でも、王子さまは続けてこう言った。

「じゃあ、バオバブも食べるんだね？」

僕は王子さまに言った。バオバブは小さな木じゃない、それどころか、お城みたいに巨大な木だ。ゾウの群れを引き連れていっても、たった１本のバオバブも食べきれないよ、と。

ゾウの群れを思い浮かべて王子さまは笑った。

「ゾウだと積み上げなくっちゃね」

そして、気のきいたことを言った。

「バオバブも大きくなる前は小さいんだ」

「そのとおりだね。でも、なぜ小さなバオバブをヒツジに食べてもらいたいの？」

すぐに、王子さまはわかりきったことだと言わんばかりに「冗談やめてよ！」と言った。おかげで、僕は一人でこのなぞを解こうと、一生懸命頭を使わなければならなくなった。

実はこういうことだった。王子さまが住んでいる星には、ほかの星と同じように、良い草と悪い草がある。良い草からは良い種が、悪い草からは悪い種ができる。でも種は目には見えない。暗い地中の深いところに眠っているからだ。やがてそのどれかが一つ目を覚ます気になる。すると、その種は伸びをして、初めはおずおずと、なんの害もない小さなかわいい茎を太陽に向かって伸ばす。それがラディッシュやバラの茎ならば伸びるままに伸ばしておいていいだろう。けれども、それが悪い植物だったならば、そうとわかった瞬間から、なるだけ早く抜いてしまわなければならない。

で、王子さまの星には恐ろしい種がある。バオバブの種だ。星の土はその種に冒されていた。バオバブというのは、気づくのが遅れると二度と引き抜けなくなる。そうして星全体を覆(おお)い、根が星を貫通する。星がとても小さくて、バオバブがあまりにも多くなると、星は破裂してしまうのだ・・・

あとになって、王子さまは僕にこう言った。

「きまりごとにすればいいんだよ。朝、自分の身じたくがすんだら、今度は星の身じたくをしてあげるんだ。バオバブは小さいうちはバラとそっくりだけど、見分けがつくようになったらすぐに全部抜くようにする。おもしろくない仕事だけど、とっても簡単なことだよ」

ある日、王子さまはこう言った。

「君の住んでいるところの子どもたちにも、バオバブがどんなふうになるのかはっきりわかるように、いい絵を１枚描いておいたほうがいいよ。いつかその子たちが旅をすることがあれば役に立つだろうし」

王子さまは続けた。

「仕事には１日遅らせてもだいじょうぶなものもある。でも、バオバブとなると、１日遅らせると、とんでもないことになる。ぼくはなまけ者が住んでいた星を知っているんだ。その人はバオバブの小さな木を３本放っておいたものだから・・・」

そこで僕は王子さまの話のとおりに、その星の絵を１枚描いた。僕は説教くさい話をするのは好きではない。でも、バオバブの恐ろしさはあまりにも知られていないし、小惑星で道に迷った人に降りかかる危険があまりにも大きいので、今度だけは遠慮しないで言うことにする。「子どもたちよ、バオバブには気をつけろ！」と。

僕の友だちである子どもたちは、僕と同じように長いあいだこの危険を知らないままで避けて通ってきたのだ。だから、彼らのためにこそ、この絵をとても一生懸命に描いた。この絵で伝える教訓には、その苦労に見合う価値がある。

「なぜ、この本にはこのバオバブの絵ほどすばらしくて、印象的な絵がほかにないのだろう？」と、疑問に思うだろう。

答えは簡単だ。がんばってはみた。でも、ほかの絵はうまくいかなかったのだ。バオバブの絵を描いたときには、せっぱつまった強い思いにかられて、我を忘れていたのだ。

6

ああ、小さな王子さま！　こうして少しずつ、ささやかで悲しい君の人生の秘密を僕は理解していった･･･。長いあいだ、心をなぐさめることといえば、日が沈むのを静かに眺めることだけだったんだね。このことを知ったのは４日目の朝、君がこう言ったときだった。

「ぼく、夕日が大好きなんだ。ねえ、夕日を見に行こうよ」

「でも、待たなくちゃ」

「待つって何を？」

「日が沈むのをだよ。そのときまで待たなくちゃ」

初め、君はびっくりした様子だった。でもすぐに声を出して笑って、こう言ったね。

「ぼくはいつだって自分の星にいるような気になっちゃうんだ！」

そうだね。誰もが知っているように、アメリカで正午のとき、フランスでは日が沈む。

だからもし１分でフランスまで行けるのであれば、正午でも夕日を見に行けるだろう。でも残念なことに、フランスはそれには遠すぎる。ところが、王子さま、君の小さな星では、イスをちょっと動かせばいいんだね。そうすればいつだって好きなときに、昼が終わり、たそがれが降りてくるのを見ることができるんだね。

君はこう言った。

「ある日なんか、日が沈むのを44回も見たよ」

しばらくしてから、さらにこう言った。

「ねえ･･･人って、とても悲しいときには、夕日が好きになるものだよね･･･」

「そのときはとても悲しかったの？　44回夕日を見た日は」

しかし、王子さま、君は何も答えなかったね。

7

5日目に、またいつものようにヒツジのおかげで、王子さまの秘密が一つ明らかになった。ずっと黙って自分の星のことを考えているうちに、聞きたいことができたのか、いきなり何の前触れもなく、僕にたずねてきたのだ。

「ヒツジが・・・小さな木を食べるっていうなら、花も食べる？」

「ヒツジは届くところにあるものなら何でも食べてしまうよ」と、僕は答えた。

「トゲのある花でも？」

「うん、トゲのある花でも」

「じゃあ、トゲは何のためにあるの？」

そんなことは知ったことではなかった。そのとき僕は、飛行機のエンジンの固く締まったボルトを緩めようとかなり忙しかったのだ。僕はとても心配だった。というのも、飛行機の故障がとても重大であることがはっきりしてきたからだ。おまけに飲み水も残り少なくなっていて、最悪の事態を恐れてもいたのだ。

「トゲは何のためにあるの？」

王子さまは質問しはじめると、けっしてあきらめない。僕は、といえば、ボルトのことですっかり動揺していたので、初めに頭に浮かんだことを言った。

「トゲなんて何の役にも立たないよ。花にトゲがあるのは、意地悪をするためだ！」

「ええ！」

王子さまは一瞬黙りこんでしまった。それから怒った様子でこう言い返した。

「君の言うことなんか信じないよ！　花は弱い生きものなんだ。何も知らない。全力で自分を守っているんだ。自分のトゲを恐ろしい武器だと思っている・・・」

僕は答えなかった。そのとき、こう思っていたのだ。

「もし、このボルトがどうしても回らないなら、ハンマーでたたいてみることにしよう」。だが、また王子さまが割りこんできた。

「本当にそう思ってるの、花が・・・」

「ちがうよ、ちがうよ！　僕はなんとも思っていないよ。ぱっと頭に浮かんだことを言っただけだ。ねえ、僕は重要なことで忙しいんだ！」

王子さまはぼう然として、僕をじっと見た。

「重要なこと！」

王子さまは僕を見ていた。ハンマーを手に持ち、機械油で指を真っ黒にして、王子さまにはとても醜く見える物体にかがみこんでいる僕を。

「大人みたいな言い方するんだね！」
　それを聞いて僕は少し恥ずかしくなった。王子さまは容赦なく続けた。
「君は何もかもごちゃまぜにしている･･･何もかもいっしょくたにしているよ･･･」
　王子さまは本当にすごく怒っていた。そして金色の巻き髪を風に揺らしながらこう言った。
「ぼくは真っ赤な顔をしたおじさんがいる星を知っている。その人は花の香りをかいだことなんか一度もない。星を見たこともない。誰かを愛したこともない。生まれてから、足し算しかしたことがないんだ。一日中、何度も何度も君みたいなことを言うんだ。『私は重要なことで忙しい！』って。そう言ってふんぞり返っているんだ。でも、そんなのは人間じゃない。キノコだ！」
「なんだって？」
「キノコだ！」
　王子さまは、怒りのあまり顔が真っ青になっていた。
「花は何百万年も前からトゲを生やしてきた。何百万年も昔からヒツジも花を食べてきた。どうして花がわざわざ何の役にも立たないトゲを生やすのか知ろうとすることが、重要なことじゃないっていうの？　ヒツジと花の戦いは重要なことじゃないの？　真っ赤な顔のデブのおじさんの足し算より重要じゃないっていうの？　ぼくが、このぼくがこの世で一つっきりの花を知っていて、その花はそのほかのどこでもないぼくの星で咲いていて、だけどある朝、小さなヒツジが何も知らなくてひと口で食べちゃうかもしれないんだ。ああ！　そんなことは大事じゃないって、君は思うんだ！」
　話しているうちに、王子さまの顔は真っ青から真っ赤に変わった。
「もし誰かがある花を愛していて、何百万もの星の中でたった１輪だけ花を咲かせるとしたら、星空を見上げるだけでその人はしあわせになれるんだ。その人は『どこかの星には、自分の愛する花があるんだ･･･』と思えるから。でも、ヒツジがその花を食べてしまったら、一瞬で星空が全部真っ暗になっちゃうんだ･･･それが大事なことじゃないって、君は思うんだね！」
　王子さまはそれ以上何も言えなくなった。すすり泣いていて言葉にならなかったのだ。
　すっかり夜になっていた。僕の手から工具が落ちていた。ハンマーもボルトものどの渇きも死も僕にとって重要なことではなくなっていた。一つの星、一つの惑星、僕の星、この地球に、今や、なぐさめてあげなければいけない王子さまがいるのだから。
　僕は王子さまを抱きしめ、やさしくゆすりながらこう言った。
「君が愛している花はだいじょうぶだよ。僕が君のヒツジに口輪を描いてあげるから。君の花のまわりに囲いを描いてあげるよ。僕が･･･」
　そのあと、どう言えばいいのかわからなかった。不器用にも、まごついてしまって

いたのだ。どうすれば王子さまの心に届くのか、どこまでいけば王子さまの気持ちに追いつき、ふたたび気持ちが通じあうようになれるのか、僕にはわからなかった。

　これほどまでに不可解なところなのだ、涙の国というものは。

8

まもなく僕はこの花のことをよく知るようになった。王子さまの星では、それまで花はとても単純なつくりのものばかりだった。花びらは一重で、場所もまったくとらず、誰のじゃまにもならなかった。ある朝、草に混じって姿を現して、夜には静かに消えていく。ところが、ある日、どこからともなく飛んできた種から、見たことがない花の芽が出てきた。王子さまは自分の星の花の芽とはまるで似ていない、この小さな芽をしっかりと見張っていたのだ。新種のバオバブかもしれなかったからだ。

芽が伸びて小さな木になると、もう伸びなくなって花をつける準備を始めた。王子さまは大きなつぼみが初めて出てきたのを見て、そのつぼみからなにか奇跡のようなものが現れるにちがいないとすぐに感じた。だが、花は緑色のがくに守られながら、自分が美しく現れる準備を終えても、まだ不満足だった。じっくりと色を選んで、ゆっくりと美しいドレスをまとい、1枚1枚花びらを整えた。ヒナゲシみたいにしわくちゃのままこの世に出ていきたくなかったのだ。完璧に美しく輝いた姿しか見せたくなかった。そう、とてもおしゃれな生きものだったのだ！　こうして秘密の身じたくは何日も何日も続いた。

とうとうある朝、ちょうど日の出の時刻に花は突然姿を現した。

そして、これほど念入りにきちんと身じたくを終えたのに、あくびをしながらこう言った。

「あら！　まだはっきり目が覚めていないようだわ。ごめんなさいね、花びらがまだすっかり整っていなくて・・・」

それでも、王子さまはすっかり見とれてしまって、思わずこう言った。

「ああ、なんてきれいな花なんだ！」

「そうなの」花は甘い声で答えた。「お日様といっしょに生まれたのよ、私・・・」

あまり控えめじゃないな、と王子さまはすぐに気づいた。それでも花はとても感動的で、とても刺激的だった。

花はすぐに続けて言った。「朝食の時間じゃないかしら。私に必要なものを思いついていただけないかしら？」

王子さまはすっかりどぎまぎして、じょうろに新鮮な水を汲みに行った。こうして王子さまは、この花の世話をしたのだった。

また、こうしてすぐに花はうぬぼれて――それは実のところ、ちょっと扱いにくかったのだが――王子さまを困らせるようになった。たとえばある日、自分の四つのトゲ

の話をしながら、王子さまにこう言った。
「トラたちに鋭い爪を持ってこさせて！」
「ぼくの星にはトラはいないよ」王子さまは反論した。「それに、とにかくトラは草を食べないよ」
「私は、草ではないのよ」と、花は甘い声で答えた。
「ごめんなさい･･･」
「私はトラなんかちっともこわくないの。でも風はこわいわ。私についたてを用意していただけないかしら？」と、花は続けて言った。
「風がこわいって、それは困ったことだね、植物なのに」王子さまはそう言って、心の中で思った。「この花はとてもやっかいな生きものだぞ･･･」
「夜になったら、ガラスの覆いをかぶせてね。あなたが住んでいるところは、とても寒いのですもの。私がやってきたところは･･･」
　でも、そこで花は口を閉じた。なにしろ、やって来たときは、種の姿だったのだ。ほかの世界のことは何も知っているはずがないだろう。こんな単純なうそを思わずつきかけたことがきまり悪くて、王子さまが悪いのだと思わせるために、２、３回咳をした。
「ついたては？」
「探しに行こうとしているところに、あなたが話しかけてきたんだ･･･」
　花はまたわざと咳をして、王子さまに自分が悪かったと思わせようとした。
　こうして、王子さまは愛情としか言いようのない好意をさまざまに示していたが、しばらくすると、花の言うことを疑うようになった。つまらない言葉を真に受けてしまい、とてもみじめな気持ちになった。
「あの花の言うことを聞くんじゃなかった」ある日､王子さまは僕に打ち明けた。「花の言うことなんて聞いちゃいけない。ただ見たり香りをかいだりするだけでいいんだ。あの花はぼくの星をいい香りにしてくれた。でも、ぼくはそれを楽しめなかった。トラの爪の話だって、とても困ったけど、ただやさしい気持ちとかわいそうに思う気持ちになるだけでよかったんだ」
　王子さまはさらに打ち明けた。
「実は、ぼくは何にもわかっていなかったんだ！　言ったことじゃなくて、してくれたことで判断すればよかったんだ。あの花はすばらしい香りと輝くような美しさでぼくを包んでくれた。ぼくは逃げたりしてはいけなかったんだ･･･ あの花があれこれ困らすようなことを言ったのも、ぼくを好きだったからだと見抜かなくちゃいけなかったんだ。花っていうのはとても気まぐれなものなんだ！　でも、ぼくは幼すぎて、あの花をどう愛したらいいのかわからなかったんだ･･･」

9

星から出ていくのに、王子さまはきっと渡り鳥の群れを利用したのだろう。旅立ちの朝、王子さまは自分の星を完璧に片付けた。ていねいに活火山のそうじをした。星には活火山が二つあって、これらは朝、朝食を温めるのにとても便利だった。また、死火山も一つあった。だが、王子さまの言うとおり、死火山かどうか誰にもわからないのだ。そういうわけで、王子さまは死火山もそうじした。念入りにそうじしておけば、火山はゆっくり安定して燃えて噴火はしない。火山の噴火とは煙突の中で火事が起きるようなものなのだ。

地球上では、僕たちはあまりにも小さすぎて火山のそうじはできない。だから火山はつぎつぎと災害を引き起こすのだ。

王子さまは、少し沈んだ気持ちでバオバブの小さな芽を抜いた。自分はもう戻ってこないだろうと思っていた。でもこの最後の朝、こうしたやりなれた作業のすべてがとても大切なものに思われた。そうして、最後に自分の花に水をやり、ガラスの覆いをかぶせてやろうとしたときに、自分が泣きそうになっているのに気がついた。

「さようなら」と、王子さまは花に言った。

でも、花は答えなかった。

「さようなら」と、王子さまはもう一度言った。

花は咳をした。でも風邪をひいていたからではなかった。

「私、ばかだったわ」とうとう花が言った。「許してね。しあわせになってね・・・」

花から責める言葉が出てこなかったので王子さまは驚いた。当惑してその場に立ちつくした。ガラスの覆いは宙ぶらりんになった。王子さまはこの静かな柔らかい言葉が理解できなかったのだ。

「もちろん、私はあなたを愛しているのよ。そのことをあなたがずっとわからなかったのは私のせいなの。どうでもいいことだけど。でも、あなたも私と同じくらいばかだった。しあわせになってね・・・ガラスの覆いはそこに放っておいていいわ。私にはもう必要ないもの」

「でも、風が・・・」

「風邪はそれほどひどくないの・・・冷たい夜風に当たっていれば良くなるわ。私は花なんですもの」

「でも動物が・・・」

「チョウチョとお友だちになりたかったら、２匹や３匹の毛虫がいてもがまんしな

くっちゃ。チョウチョってとってもきれいなようね。チョウチョや毛虫じゃないとしたら誰が私を訪ねてくれるっていうの？　あなたは遠くに行っちゃうし･･･大きな動物はね、私全然こわくないわ。私にだって爪があるもの」

花は無邪気に四つのトゲを見せた。そうしてこう言った。

「ここでぐずぐずしてないで。出ていくって決めたんでしょ。さあ、行って！」

花は泣いているところを、王子さまに見られたくなかったのだ。そのくらい気位の高い花だった･･･

10

王子さまは、小惑星 325、326、327、328、329、330 のあたりまでやってきた。そこで見聞を広めるために、それらの星を訪問しはじめた。

最初の星には王様が住んでいた。王様は紫色の服に白いオコジョの毛皮をまとって、簡素だが威厳のある玉座に座っていた。

「おお！　臣下が来たか」と、王子さまを見つけると、王様は大きな声で言った。

「一度も会ったことがないのに、ぼくが誰だかどうしてわかるのだろう？」と、王子さまは不思議に思った。

王様というものにとって世界はとても単純なものであることを、王子さまは知らなかったのだ。王様にとってすべての人は臣下なのだ。

「もっとよく見えるように近寄りなさい」

やっと従える相手ができたので、王様は得意になってそう言った。

王子さまは座る場所を探したが、王様の立派な白い毛皮のコートで、星はすっかりふさがっていた。それで立ったままでいたのだが、疲れていたのであくびが出た。

「王様の前であくびをするとは礼儀に反しておる。あくびは禁止だ」と、王様は言った。

「しかたがないんです。自分では止められません」王子さまはどぎまぎしながら答えた。「長い旅を続けてきたんです。それに寝ていなかったので･･･」

「では、あくびをすることを命じる。人があくびをするのを何年も見ておらん。あくびというのはわしにとって興味がある。さあ！　もう一度あくびをしなさい！　これは命令だ」

「そんなこと言われたらこわい･･･ もうあくびなんてできない･･･」と、王子さまはすっかり当惑してつぶやいた。

「うーむ。では、こう命じる。ときにはあくびをして、ときには･･･」

王様は少し言葉につまって、不愉快そうだった。

というのも、王様が何より大切にしているのは自分の威光に傷がつかないことだったからだ。命令に従わないことに我慢ならないのだ。絶対君主なのだ。しかし、とてもいい人だったので無茶な命令を出したりはしなかった。

「わしが将軍に海鳥になれと命じたとする。将軍がそれに従わなかったとしても、それは将軍が悪いのではないだろう。わしが悪いのだろう」と、王様は例をあげて説明した。

「座ってもよろしいでしょうか？」王子さまは今度はおずおずとたずねた。
「座りなさい、命令する」王様はそう答えると、白い毛皮のコートのすそをおごそかに引きよせた。
　しかし、王子さまには不思議だった･･･この星はこんなに小さい。この王様はいったい何を治めているのだろう？
「陛下、質問してもよろしいでしょうか？」と、王子さまは王様に言った。
「質問しなさい、命令する」王様は急いで言った。
「陛下は、何を治めておられるのですか？」
「すべてを、だ」王様はいとも簡単に答えた。
「すべてを、ですか？」
　王様は自分の星、すべての惑星、恒星を含めるような身ぶりをした。
「そのすべてですか？」と、王子さまは言った。
「このすべてを、だ」と、王様は答えた。
　というのも、王様は絶対君主であるばかりか、宇宙の君主でもあったからだ。
「では、すべての星は陛下の命令に従うのですか？」
「もちろんだ。即座に従う。従わないことなど許さん」
　あまりの権力に王子さまはびっくりした。もし自分にそんな権力があったら、一日に44回どころか、72回、いや100回や200回だって、イスを動かさなくても夕日を見られただろうなあ、と王子さまは思った。王子さまは遠くに残してきた自分の小さな星のことを思い出してちょっと悲しくなったので、勇気を出して王様にお願いをしてみた。
「ぼく、夕日を見たいのですが･･･よろしければ･･･太陽に沈めと命令してください･･･」
「わしが将軍にチョウチョのように花から花へ飛べとか、悲劇を一作書けとか、海鳥になれなどと命令して、将軍がその命令を実行しないとすれば、どちらが間違っているだろう？　将軍かわしか？」
「陛下です」と、王子さまはきっぱりと言った。
「そのとおりだ。人にはそれぞれができることを要求しなければならん」王様はさらに続けた。「権威が受け入れられるのは、何よりも道理に基づいているからだ。もし、わしが人民に海に行って身を投げろと命令すれば、革命が起こるだろう。命令が道理にかなっているからこそ服従を求める権利があるのだ」
「では、夕日のことは？」王子さまは王様に質問を思い出させた。いちど質問しはじめたら、けっして忘れない王子さまだったから。
「夕日は見せよう。命令する。だが、わしの統治学によって判断し、状況が好ましくなるまで待つのだ」

「それはいつですか？」、王子さまはたずねた。
「うーむ」王様はそう言ったまま黙りこんで分厚い暦を調べていたが、ようやくこう言った。「うーむ、だいたい・・・だいたい・・・今日の夕方の7時40分ごろになる。そのときに太陽がわしの命令に見事に従うさまを見ることになるだろう！」
　王子さまはあくびをした。夕日が眺められなくて残念だったし、少し退屈しはじめていたのだ。
「ここですることはもうありません。ですからまた出発します」と、王子さまは王様に言った。
「行ってはならぬ」臣下を得て得意になっていた王様は言った。「行ってはならぬ。お前を大臣にしよう！」
「何の大臣ですか？」
「・・・法務大臣だ！」
「でも、裁判しなきゃいけない人なんて誰もいません」
「それはわからん。わしはまだこの王国を全部めぐってみたことがないのだ。もうすっかり年をとってしまったが、この星には馬車を置く場所もない。歩くのは疲れる」
「ああ、そうですか。でも、ぼくはもう見てきました！」王子さまはそう言うと、振り向いて星の反対側をもう一度眺めた。あっち側にはこっち側と同じように誰もいなかった・・・
「では、自分自身の裁判をしなさい。それがいちばん難しい裁判だ。他人を裁くより自分を裁くほうがはるかに難しい。自分を正しく裁けるならば、真の賢者ということになる」
「ええ、でもどこにいても自分を裁くことはできます。この星にいる必要はありません」と、王子さまは言った。
「うーむ。この星のどこかに年をとったネズミがおる。夜にネズミの声が聞こえるからだ。このネズミを裁けばよかろう。ときどき死刑を宣告してもかまわぬ。ネズミの命はお前の裁判次第だ。だが、毎回特赦を与えるように。倹約せねばならぬからだ。ネズミは１匹しかおらんのだ」
「ぼくは死刑なんか誰にも宣告したくありません。もう行きますね」
「いや、いかん」と、王様は言った。
　出発の準備をすっかり整えていた王子さまは、年老いた王様を悲しませたくはなかったのでこう言った。
「陛下がただちに従ってほしいとお思いになるなら、ぼくに道理にかなった命令を出せばいいのです。たとえば、１分以内に行ってしまえ、と命令することです。状況は好ましいようです・・・」
　王様が返事をしなかったので王子さまは少しためらったが、やがてため息をついて

出発した。
「お前を大使に任命する」と、王様は慌てて叫んだ。
　王様は権威あるどうどうとした様子だった。
「大人ってとっても変だなあ」と、王子さまは旅を続けながら、つぶやいた。

11

２番目の星にはうぬぼれ屋が住んでいた。

「ああ！　私を称える者がやってきたな！」と、王子さまを見かけると遠くから大声で言った。

うぬぼれ屋にとって、自分以外はみんな自分を賞賛する存在なのだ。

「こんにちは。変わった帽子ですね」と、王子さまが言った。

「これはあいさつ用の帽子だ。喝采をあびたときに、あいさつとして帽子を持ち上げるんだ。でも、残念なことに、これまで誰も通りかかったことがない」と、うぬぼれ屋が答えた。

「そうなの？」と、王子さまは言ったが、うぬぼれ屋が何を言っているのかわからなかった。

「拍手しなさい。両手をたたいて」と、うぬぼれ屋が指示した。

王子さまは拍手をした。うぬぼれ屋は帽子を持ち上げて、控えめにあいさつした。

「これは王様を訪ねるよりおもしろいな」と、王子さまは思った。そこでもう一度拍手をした。うぬぼれ屋はもう一度帽子を持ち上げてあいさつした。

これを５分も繰り返すと、王子さまはこの単調なゲームに飽きてきた。

「帽子を降ろすには、どうすればいいの？」

王子さまはそうたずねたが、うぬぼれ屋には聞こえていないようだった。うぬぼれた人たちというのは、自分を賞賛する言葉しか耳に入らないのだ。

「君は本当に私を賞賛しているのかな？」と、うぬぼれ屋は王子さまにたずねた。

「賞賛ってどういう意味？」

「賞賛というのは、私がこの星でいちばんハンサムで、いちばん良い服を着ていて、いちばん金持ちで、いちばん頭がいいと思うことだよ」

「でも、この星にはあなたしかいないでしょ！」

「お願いだ。それでも私を賞賛してくれ」

「賞賛するよ」王子さまはちょっと肩をすくめて言った。「でも、賞賛されることがなんでそんなにおもしろいの？」

そうして王子さまはその星を立ち去った。

「大人って本当に変だなあ」と、旅を続けながら、王子さまはつぶやいた。

12

　次の星には酒びたりの男が住んでいた。その星を訪れたのはほんの短い時間だったが、それでも王子さまはひどく気が沈んでしまった。
「そこで何をしているの？」と、王子さまは酒びたりの男に聞いた。男はずらりと並んだ空っぽの瓶を前にして、黙って座っていた。
「酒を飲んでいるんだ」と、ふさぎ込んだ様子で男が答えた。
「なぜ、飲んでいるの？」と、王子さまは聞いた。
「忘れるためさ」と、男が答えた。
「忘れるって、何を？」と、王子さまは聞いたが、もうその男を気の毒に思っていた。
「恥じているのを忘れるためさ」と、男はうなだれて打ち明けた。
「恥じているって、何を？」と、王子さまはしつこく聞いた。その男の力になりたかったのだ。
「酒を飲んでいることを恥じているんだよ！」と、酒びたりの男は言うと、そこで話すのをやめて、黙りこんでしまった。
　王子さまは困惑してその星を立ち去った。
「大人って、本当にとってもとっても変だなあ」と、王子さまは旅を続けながら、つぶやいた。

13

4番目の星は実業家の星だった。実業家は仕事に没頭していたので、王子さまがやってきても顔も上げなかった。

「こんにちは。たばこの火が消えていますよ」と、王子さまが言った。

「3たす2は5。5たす7は12。12たす3は15。こんにちは。15たす7は22。22たす6は28。火をつけなおす暇もない。26たす5は31。ふう！　これで、5億162万2731になる」

「5億って、何が？」と、王子さまが聞いた。

「え？　まだそこにいたのか？　5億100万・・・止めるわけにはいかない。私には仕事が山ほどあるのだ！　私は重要なことに関わっているのだ。たわごとにつきあっている場合ではないのだ。2たす5は7・・・」

「5億100万って、何が？」と、いちど質問しはじめると、けっしてあきらめない王子さまが繰り返した。

実業家は顔を上げた。

「この星に住んで54年になるが、仕事のじゃまをされたのは3度しかない。最初は22年前に、どこからともなくおっちょこちょいのガチョウが落ちてきたときだ。ものすごく恐ろしい音がして、そこら中に響くものだから、足し算を四つも間違えた。2度目は11年前、リューマチの発作が起きたときだ。運動不足なのだ。私にはそのあたりをぶらつく時間もない。そして3度目は・・・そう、今だ！　確か私は5億100万と・・・」

「何が何百万あるの？」

実業家は答えるまで放っておいてもらえないと、すぐに悟った。

「何百万ものあの小さなものだ、ときどき空に見えるだろう」と、実業家が言った。

「ハエのこと？」

「いや、そうじゃない。小さなギラギラしているものだ」

「ミツバチのこと？」

「いや、そうじゃない。なまけ者にむだな夢を見させる金色に輝く小さなものだ。だが私は、重要なことに関わっている人間だからね。むだな夢想などしている暇はないのだ」

「ああ！　星のこと？」

「そうだ。星のことだ」

「それで5億もの星をどうするの？」
「5億162万2731。私は重要なことに関わっているのだ。正確でないと」
「それでその星をどうするの？」
「どうするだって？」
「そう」
「どうもしない。所有しているだけだ」
「星を持っているの？」
「そうだ」
「でも、ぼくは王様に会ったけど、あの人が･･･」
「王様は所有していない、統治しているのだ。全然違うことだ」
「でも、星を持っていて何の役に立つの？」
「金持ちでいるのに役立つ」
「金持ちでいられると何の役に立つの？」
「ほかの星を買える、誰かがが新たに見つけたときに」
「この人はあの気の毒な酒びたりの男と似た理屈を言っているな･･･」と、王子さまは思った。
　それでも王子さまは質問を続けた。
「どうやったら星を持てるの？」
「星は誰のものだ？」と、実業家は不機嫌そうに聞き返した。
「わからないよ。誰のものでもない」
「じゃあ、星は私のものだ。私が最初に思いついたのだから」
「思いつくだけでいいの？」
「そのとおりだ。誰のものでもないダイヤモンドを君が見つけたら、それは君のものだ。誰のものでもない島を君が発見すれば、それは君のものだ。誰よりも先に君が何かを思いついたら特許を取る。そうすればその思いつきは君のものだ。私についても同じことだ。私は星を所有している、なぜならば私よりも前に星を所有することを思いついた者はいなかったのだから」
「それはそうだね。それで、その星をどうするの？」
「管理する。数を数え、また数えなおす。難しい仕事だ。しかし、私は生まれながらにして重要なことに関心がある人間なのだ」
　王子さまはまだ納得していなかった。
「もしシルクのスカーフを持っていれば、首に巻いて出かけられる。花を持っていたら、その花を摘んで持ち歩ける。でも星は空から摘めないよ･･･」
「そうだ。だが、銀行に預けられる」
「それどういうこと？」

「つまり、私の星の数を小さな紙に書くということだよ。それからその紙を引き出しの中に入れて鍵をかけておく」
「それだけ？」
「それで十分だ」と、実業家が言った。
「おもしろいなあ。なかなか詩的だなあ。でも、たいして重要なことじゃないな」と、王子さまは思った。
　重要なことについて、王子さまは大人たちとはとても違った考えを持っていたのだ。
「ぼくは１輪の花を持っている」王子さまは実業家との話を続けた。「その花に毎日水をやっている。ぼくは３つの火山を持っていて、それを毎週そうじする。死火山もそうじする、何が起こるかわからないからね。そうすることで、ぼくは自分の火山の役に立っているし、自分の花の役にも立っている。だけど、あなたは星の役に立っていない・・・」
　実業家は何か言おうとしたが、返す言葉が見つからなかった。そうして、王子さまはその星を立ち去った。
「大人って本当にまったくおかしなものだな」と、王子さまは旅を続けながら、思ったままにつぶやいた。

14

5番目の星はとても変わった星だった。たずねた星の中でいちばん小さな星だった。街灯が一つと点灯夫が一人いて、それでいっぱいだったのだ。住む人がいなくて家一軒ない星で、街灯と点灯夫が何の役に立っているのか、王子さまにはまったくわからなかった。それでも王子さまはこう思った。

「この人もおかしな人なのかな。でも王様や、うぬぼれ屋や、実業家や、酒びたりの男ほどではないね。とにかくこの人の仕事には意味があるのだから。この人が街灯をつけると、星がもう一つ生まれるみたいだし、花が1輪咲くみたいだ。この人が街灯を消すと、その花か星は眠りにつく。とてもすてきな仕事だな。すてきだということは、本当に役に立っているということだ」

王子さまは星に着くと、点灯夫にていねいにあいさつした。

「こんにちは。なぜたった今、街灯を消したの？」

「そういう命令なんだよ。おはよう」と、点灯夫は答えた。

「命令ってどんな？」

「街灯を消すこと。こんばんは」

そしてまた街灯をともした。

「どうしてまたつけたの？」

「そういう命令なんだ」

「わからないな」

「わかることなんかないよ。命令は命令なんだから。おはよう」

そう言って、点灯夫は街灯を消した。

それから赤いチェック柄のハンカチで額をぬぐった。

「ひどい仕事だよ。昔はむりのない仕事だったんだけどね。朝、街灯を消して、夜にまたつけていた。昼は休めたし、夜は眠れたものだ」

「で、そのあと命令が変わったの？」

「命令は変わってないよ。それこそが悲劇だ！　星は毎年自転が速くなっているのに、命令は変わっていないんだ！」と、点灯夫が言った。

「それで？」と、王子さまが聞いた。

「それで、この星は今では1分間に1回回るから、私は1秒も休めない。1分ごとに街灯をつけたり消したりしなきゃいけないんだ！」

「すごくおもしろい！　この星では1日は1分間しか続かないんだ！」

「おもしろくなんかない！　こうやって話しているあいだにもう１か月もたったんだ」
「１か月？」
「そうだ。１か月だ。30 分は 30 日なんだ。こんばんは」
　そして、また点灯夫は街灯をともした。
　王子さまは点灯夫を見つめた。そして、こんなにも命令に忠実な点灯夫が好きになった。かつてイスを動かすだけで、何回も夕日を眺めていたことを思い出した。王子さまはこの人を助けたくなった。
「ねえ、ぼくは好きなときに休める方法を知ってるんだけど･･･」
「いつだって休みたいさ」と、点灯夫が言った。
　人は勤勉でありながら、同時になまけ者だということもある。
　王子さまは続けた。
「この星はこんなに小さいんだから、大またで 3 歩歩けばぐるっと回れるよね。かなりゆっくり歩くだけでいつだってお日様の下にいられるよ。休みたくなったら歩けばいいんだよ。そうしたら好きなだけ昼間が続く」
「それはあんまり役に立たないな。この世で好きなのは寝ることなんだよ」
「運が悪いなあ」
「おれは運が悪いんだ。おはよう」と、点灯夫が言った。
　そう言って、点灯夫は街灯を消した。
「あの人は笑われるんだろうなあ。王様にも、うぬぼれ屋にも、酒びたりの男にも、実業家にも。でも、ぼくには、ばかげていないように見えるのはあの人だけだ。自分のことでなく、ほかのことを考えているからだろうな」と、王子さまは旅を続けながら、つぶやいた。
　王子さまは残念そうにため息をつくと、さらにこうつぶやいた。
「友だちになれそうだったのはあの人だけだ。でも、あの星は小さすぎて二人分の場所がないんだなあ･･･」
　王子さまは口に出さなかったが、この星を離れるのは、とても残念だった。この星では毎日 1440 回も夕日が見られたのだから。

15

6番目の星は前の星より10倍も大きな星だった。そこには大きな本を何冊も書いているおじいさんが住んでいた。

「ほう、探検家が来たか！」と、王子さまが近づくのを見るとおじいさんは大声で言った。

王子さまは机の上に座ると、ほっと息をついた。もうずいぶん旅をしてきたのだ！

「どこから来た？」と、おじいさんが言った。

「その大きな本は何？　あなたは何をしている人？」と、王子さまは聞いた。

「私は地理学者だ」と、おじいさんが答えた。

「地理学者って何？」と、王子さまは聞いた。

「海や川や町、山や砂漠がどこにあるのか知っている学者のことだ」

「おもしろいなあ。やっとここには本当の仕事をしている人がいたぞ！」と言って、王子さまはその星をぐるっと見回した。これまで見た中でいちばんすばらしい堂々とした星だった。

「あなたの星はとてもきれいだね。海はあるの？」

「わからないな、そんなことは」と、地理学者は言った。

「あーあ」王子さまはがっかりしたが、今度はこう聞いた。「じゃあ、山は？」

「わからないな、そんなことは」と、地理学者は言った。

「じゃあ、町や川や砂漠は？」

「それもわからないな」

「でも、あなたは地理学者なんでしょ！」

「そのとおりだ。だが、私は探検家ではない。この星には一人も探検家がいないのだ。出かけていって、町や川や山や海や海洋や砂漠を数えるのは地理学者ではない。地理学者の仕事は重要だから、ぶらぶら出かけるわけにはいかないのだ。机から離れることはない。研究室にいて探検家を迎えるのだ。探検家にいろいろな質問をして、彼らの旅の報告を書き留める。その中の誰かの話に興味を引かれたら、その探検家が立派な人物であるかどうか調べさせるのだ」

「どうしてそんなことを？」

「探検家が嘘をついたら、地理学者の本がとんでもないものになってしまうからだ。酒を飲みすぎる探検家も、そういうことになるだろうな」

「どうして？」

「酔っぱらいには、ものが二重に見えるからだ。そうしたら、地理学者は山が一つしかないところに山を二つ書き留めてしまうだろう」
「そういう人を知っているよ、だめな探検家になりそうな人」と、王子さまは言った。
「それはありうるな。それで、立派な人物だとわかったら、その探検家が発見したことを調査するのだ」
「見に行くの？」
「いや、そんなことは面倒くさすぎる。その代わりに、探検家に証拠を出すように求める。たとえば、発見したのが大きな山だというならば、その山から大きな岩を持ってきてもらうわけだ」
　そう言うと、突然、地理学者は興奮した様子になった。
「だが、君は遠くからやってきたのではないか！　それなら探検家だ！　君の星のことを話してくれないか！」
　地理学者は大きな記録簿を開くと鉛筆をけずった。探検家の話を初めは鉛筆で書き留めるのだ。探検家が証拠を持ってくるまで待つ必要があるからだ。そのあと、インクで清書する。
「それで？」と、地理学者はわくわくしながらたずねた。
「ああ、ぼくの住んでいるところなら、たいしておもしろいところじゃないよ。すべてがとても小さいんだ。火山が三つあって、活火山が二つと死火山が一つ。でも、死火山かどうか誰もわからないけど」
「それはわからんな」と、地理学者が言った。
「花も１輪咲いている」
「われわれは花のことは記録しない」
「どうして？　花はぼくの星でいちばんきれいなものなんだよ！」
「花は記録しないのだ。なぜならば、花ははかないものだからだ」
「はかないって、どういうこと？」
「地理の本というものは、あらゆる本の中でもいちばん重要なことが書いてある。けっして時代遅れになることはない。山が位置を変えるのはとても珍しい。海洋から水がなくなるなどというのも、とても珍しいことだ。われわれは永遠に変わらないことを書くのだ」
「でも死火山が生き返ることもあるかもしれない」王子さまは話をさえぎった。「はかないって、どういうこと？」
「火山が眠っていようと目覚めていようと、われわれにとっては同じことだ。われわれにとって大切なのは山だ。山は変わることがないからね」
「で、はかないって、どういうこと？」と、王子さまは聞いた。いちど質問しはじめたら、けっしてあきらめないのだ。

「それは、すぐに消えてなくなるかもしれないということだ」
「ぼくの花もすぐに消えてなくなるかもしれないの？」
「もちろんだ」
「ぼくの花ははかないんだ。身を守るのに四つのトゲしか持っていない。それなのに、ぼくは、自分の星に一人ぼっちにしてきたんだ！」と、王子さまは思った。
　このとき初めて、王子さまの胸に後悔の念がこみあげてきた。それでも、勇気をふりしぼってこう聞いた。
「ぼく、今度はどの星に行けばいいでしょうか？」
「地球だな、なかなか評判のいい星だ」と、地理学者は答えた。
　王子さまは花のことを考えながら、その星を立ち去った。

16

こうしたわけで、7番目の星は地球だった。

地球はどこにでもあるような普通の星ではないのだ！　王様は111人もいるし（もちろん黒人の王様も含めてだ）、地理学者は7千人、実業家は90万人、酒びたりの男は750万人、うぬぼれ屋は3億1100万人、つまり20億人くらいの大人が住んでいる。

地球がどれほど大きいか説明すると、電気が発明される前は、六つもある大陸に、46万2511人という軍隊並みの数の街灯の点灯夫を雇っておく必要があったのだ。

少し遠くから見ると、これはすばらしい光景だった。軍隊並みの数の点灯夫の動きは、まるでオペラのバレエのようだった。まずは、ニュージーランドとオーストラリアの点灯夫が登場する。そして街灯に火をともすと、退場して眠りにつく。

次に、中国とシベリアの点灯夫が登場してきて踊る。そうして、彼らも舞台のそでに消えていく。続いて、ロシアとインドの点灯夫、それからアフリカとヨーロッパ、さらに南米、そして北米の点灯夫が登場する。舞台に登場する順番を誤ることはけっしてない。まったくすばらしい光景だった。

ただ、北極で1本しかない街灯の担当者と南極に1本しかない街灯の点灯夫、この二人だけはあくせく働かず気楽に暮らしていた。二人は1年に2回、仕事をするだけだったから。

17

人は気のきいたことを言おうとすると、事実から少しそれることもある。点灯夫について僕が言ったことは、全部が本当だというわけではない。だから地球を知らない人には誤解を与えてしまうかもしれない。地球上で人間が占めている場所はごくわずかなのだ。地球に住んでいる20億人の人間が大きな集会のときのように直立して場所を詰めれば、たて20マイル、横20マイルの広場に楽に入るだろう。積み重ねれば、すべての人間は太平洋の小島におさまるだろう。

もちろん、大人はこんな話は信じないだろう。自分たちは大きな場所を占めていると思いこんでいる。自分たちはバオバブと同じくらいすごいのだと思っている。だったら、自分で計算してみるようにすすめてやればいい。彼らは数字が大好きだから喜ぶことだろう。でも、君たちはそんなことに時間をむだ遣いしないように。必要のないことだから。きっと、僕の言うとおりに信じてくれるだろう。

王子さまが地球に着いたとき、あたりに人の姿が見えなくてびっくりした。星を間違えてしまったのかと不安になり始めた。そんなとき、金色の、月の色の輪のようなものが砂の中で動いた。

「こんばんは」と、王子さまは礼儀正しく言った。

「こんばんは」と、ヘビが言った。

「ぼくが降りてきたこの星は、何という星なの？」と、王子さまがたずねた。

「地球だよ。ここはアフリカだ」と、ヘビが答えた。

「そうか！　じゃあ、地球には誰もいないの？」

「ここは砂漠だ。砂漠には人はいない。地球は大きいんだ」と、ヘビが言った。

王子さまは岩の上に座って空を見上げた。

「いつかまた自分の星に戻っていけるように、星は光っているのかなあ。ぼくの星を見て。ちょうど真上に光っているよ。でもなんて遠いんだろう！」

「美しい星だ。ここには何をしに来たんだ？」と、ヘビが言った。

「ぼく、花とうまくいかなくなってたんだ」と、王子さまは言った。

「ふうん」と、ヘビが言った。

そして、王子さまとヘビは黙りこんだ。

「人間たちはどこにいるの？」王子さまはやっとまた話し出した。「砂漠ってちょっとさびしいね・・・」

「まわりに人間がいてもやっぱりさびしいさ」

王子さまはしばらくじっとヘビを見つめて、とうとうこう言った。
「君は変な動物だね。指みたいに細くって・・・」
「でも王様の指より強い」と、ヘビが言った。
王子さまはにっこりした。
「君はそんなに強くないよ。足もないじゃないか。旅もできないよ・・・」
「船で運ぶよりもっと遠いところまでお前を連れていけるぜ」と、ヘビは言った。
ヘビは金のブレスレットのように王子さまの足首にからみついた。
「おれが触ったやつはみんな、もともといた大地に返してやるんだ。でもお前はけがれてないし、おまけに星からやってきたから・・・」
王子さまは何も答えなかった。
「かわいそうになあ。こんなにか弱いのに、岩でできたこんな地球に来て。いつか、自分の星に帰りたくてたまらなくなったら、手助けしてやるよ。おれには・・・」
「うん！　わかったよ」王子さまが答えた。「でも、どうして君はなぞのようなことばかり言うの？」
「おれはすべてのなぞを解決できるから」と、ヘビが言った。
そうして王子さまもヘビも黙りこんだ。

18

王子さまは砂漠を横切ったが、途中で１輪の花にしか会わなかった。花びらが３枚の、まったく何でもない花だった。

「こんにちは」、王子さまが言った。

「こんにちは」、花が言った。

「人間はどこにいますか？」、王子さまはていねいにたずねた。

花は一度、キャラバンが通っていくのを見たことがあった。

「人間？　6、7人はいると思うわ。見たことがあるもの、何年か前だけどね。でも、どこで出会えるかはわからないわ。風に吹かれて飛ばされてしまうのだもの。人間には根がないの、だから生きていくのがとても難しいのよ」と、花は答えた。

「さようなら」、王子さまが言った。

「さようなら」、花が言った。

19

　そのあと、王子さまは高い山に登った。これまで知っている山はひざの高さまでしかない三つの火山だけだった。死火山は足をのせるのに使っていた。「こんな高い山から眺めれば、この星全体とすべての人間が一目で見えるだろう・・・」と、王子さまは思った。

　ところが、針のように切り立った岩の峰以外には何も見えなかった。

「こんにちは」、王子さまは礼儀正しく言った。

「こんにちは・・・こんにちは・・・こんにちは・・・」と、こだまが答えた。

「あなたは誰？」、王子さまは言った。

「あなたは誰・・・あなたは誰・・・あなたは誰・・・」と、こだまが答えた。

「友だちになってね。ぼく一人ぼっちなんだ」

「ぼく一人ぼっちなんだ・・・一人ぼっちなんだ・・・一人ぼっちなんだ・・・」と、こだまが答えた。

「なんて変な星なんだろう」王子さまは思った。「からからに乾いていて、とんがりだらけで、きびしくて険しい。おまけに人には想像力がない。何を言われても、そのまま繰り返すだけなんだもの・・・ぼくの星には花があった。あの花は、いつもぼくより先に話し出したんだ・・・」

20

長いあいだ歩き続けて、砂と岩と雪を越えたところで、王子さまはとうとう１本の道を見つけた。道というのは、すべて人間のいるところにつながっているものだ。

「こんにちは」、王子さまは言った。

そこには庭があって、たくさんのバラが咲きほこっていた。

「こんにちは」と、バラが言った。

王子さまはバラを見つめた。花はどれも、星に残してきた王子さまの花にそっくりだった。

「君たちは誰？」、王子さまはショックを受けてたずねた。

「私たちはバラよ」と、バラが言った。

王子さまはどうしようもなく悲しくなった。王子さまの花は、自分のような花は世界でたった１輪しかない、と話していたのだ。ところが、目の前には、そっくりな花が 5000 もあった、しかもたった一つの庭に！

「あの花が見たら、すごく困るだろうなあ・・・ひどく咳をして、死にかけているふりだってするだろうなあ、笑われないように。そして、ぼくは看病して生き返らせるふりをしなければならないんだ。そうしなかったら、ぼくにも恥ずかしい思いをさせるために、本当に死んじゃうだろうから・・・」と、王子さまは思った。

それから、王子さまはこんなことも考えた。

「ぼくは世界でたった１輪しかない花を持っていて、めぐまれていると思っていた。でもありふれたバラを１輪持っているだけだった。ありふれたバラを１輪、膝までしかない三つの火山、それも一つは永遠に火を噴かないかもしれない・・・これじゃあ、立派な王子さまになんかなれないよ・・・」

そうして、王子さまは草の上につっぷして泣いた。

21

キツネが現れたのは、そんなときだった。
「こんにちは」、キツネが言った。
「こんにちは」、王子さまはていねいにあいさつした。だが、振り向いても何も見えなかった。
「ここにいるよ。リンゴの木の下だよ・・・」という声がした。
「君は誰？」と王子さまはたずねてから、こう言った。「君、とてもきれいだね」
「キツネだよ」、キツネが言った。
「こっちに来てぼくと遊ぼうよ。ぼく、すごく悲しいんだ」と、王子さまが誘った。
「君とは遊べないな。なつかされていないから」と、キツネが言った。
「ああ、ごめんなさい」と、王子さまが言った。
けれども、しばらく考えてから王子さまが言った。
「なつかせるって、どういうこと？」
「君はここの人じゃないんだな。いったい何を探しているんだい？」と、キツネが言った。
「人間を探しているんだよ。なつかせるって、どういう意味？」と、王子さまは言った。
「人間か。銃を持って狩りをする奴らだ。まったくやっかいだ。ニワトリも飼っている。それだけが奴らのいいところだ。ニワトリを探しているのかい？」
「ちがうよ。友だちを探しているんだ。なつかせるって、どういう意味？」と、王子さまが言った。
「よく忘れられてしまうことだけどね。絆を結ぶってことだよ・・・」と、キツネが言った。
「絆を結ぶ？」
「そのとおりだ。ぼくにとって、君はまだ、ほかの10万人の男の子と何も変わらない。だから、ぼくには君が必要じゃない。君にとってもぼくは必要じゃない。ほかの10万匹のキツネとなんの変わりもない。でも、もし君がぼくをなつかせたら、ぼくらはお互い必要なものになる。ぼくにとって君は世界で一人しかいない男の子になる。ぼくも君にとって世界に1匹しかいないキツネになる・・・」と、キツネが言った。
「なんだかわかってきた」王子さまが言った。「1輪の花があってね・・・その花はぼくをなつかせていたんだと思う」

「ありうる話だな。地球ではいろんなことがあるからなあ」と、キツネは言った。
「ああ、地球の話じゃないんだ！」と、王子さまは言った。
　キツネはわけがわからないという様子だったが、とても興味を持ったようだった。
「ほかの星の話？」
「そうだよ」
「その星には猟師はいる？」
「いないよ」
「ああ、それはいい！　じゃあ、ニワトリは？」
「いないよ」
「思いどおりにはいかないものだな」と、キツネはため息をついた。
　だが、キツネは自分の話に戻した。
「ぼくの暮らしはとても単純なんだ。ぼくはニワトリを追いかけ、人間がぼくを追いかける。ニワトリはどれも同じようだし、人間もみな同じようだ。だからぼくはちょっと退屈している。だけど、君がぼくをなつかせてくれたら、ぼくの暮らしは日が差したようになる。ぼくは、ほかの誰とも違う君の足音が、わかるようになる。ほかの足音が聞こえたら、ぼくは地面にもぐってかくれる。でも、君の足音は、音楽みたいに、ぼくを巣の外に連れ出してくれるんだ。それから、あっちを見てごらん。麦畑が見えるだろう？　ぼくはパンなんか食べない。だから小麦なんて、何の役にも立たない。麦畑は、ぼくに何も語りかけてこないんだ。それはさびしいことだ。でも、君は金色の髪をしている。君がぼくをなつかせてくれたら、どんなにすばらしいだろう。金色の麦を見ると、君のことを思い出すようになる。麦畑に吹く風の音も好きになるんだ･･･」
　キツネは、しばらく王子さまの顔をじっと見ていた。
「お願いだ、ぼくをなつかせてくれよ！」
「そうしたいよ、とっても」王子さまは答えた。「でもあんまり時間がない。友だちを見つけなきゃいけないし、知らなきゃいけないこともたくさんあるんだ」
「人は自分がなつかせたものしか、本当に知ることはできないんだよ。人間には、もう何かを知る時間がない。彼らはすでに出来上がったものを店で買っている。でも、友情を買える店なんか、どこにもない。だから、人間はもう友だちがいないんだ。友だちがほしいなら、ぼくをなつかせてよ･･･」
「君をなつかせるには、ぼくは何をしなきゃいけないの？」と、王子さまは聞いた。
「辛抱強くならなきゃいけない。初めはぼくからちょっとだけ離れて、こんなふうに草の中に座るんだ。ぼくは、横目で君をちらっと見るんだけど、君は何も言わない。言葉っていうのは、誤解の元だからね。でも、毎日少しずつ近くに座るようにするんだ･･･」と、キツネは答えた。

次の日、王子さまは戻ってきた。
すると、キツネが言った。
「同じ時間のほうがよかったんだけどなあ。たとえば、君が午後４時にやってくるなら、ぼくは３時からうれしくなってくる。時間がたつにつれて、どんどんうれしくなってくる。そして４時になると、ぼくは、もうそわそわしたり飛び回ったりする。どんなにうれしいか君に見せるんだ！　でも、いつやってくるかわからないと、何時に心の準備を始めたらいいかわからないだろう・・・ちゃんと習慣どおりにしなきゃいけないんだよ・・・」
「習慣って何？」と、王子さまが聞いた。
「これもよく忘れられてしまうことだ。それは、ある一日をほかの日とはちがう日にするもの、ある時間をほかの時間とはちがう時間にするものだよ。たとえば、猟師たちには習慣がある。毎週木曜日に村の娘たちと踊る。だから、木曜日はぼくにはすばらしい日なんだ。ぼくは、ブドウ畑まで出かけることができる。でも、もし猟師たちがいつ踊るかわからないと、毎日がすべて同じようになって、ぼくは、少しも休めなくなっちゃうんだ」
そうして、王子さまはキツネをなつかせた。だが、王子さまが出発するときが近づいてきた。
「ああ、ぼくは泣いちゃうよ」と、キツネが言った。
「君のせいでしょ。ぼくは君に悪いことをしようなんて、少しも思わなかった。でも君がぼくになつかせてほしいと言ったから・・・」
「うん、そうだ」と、キツネが言った。
「でも、泣いちゃうんだよね！」と、王子さまが言った。
「うん、そうだ」と、キツネが言った。
「じゃあ、ぼくになつかせられたって、いいことなんかなかったじゃないか！」
「いや、あったよ。麦畑の色だ」
キツネはさらにこう言った。
「バラたちにもう一度会いに行ってごらん。君のバラが、この世にたった一つのものだと、今度はわかるから。それから、ぼくにさよならを言いに来て。そうしたら、君に秘密を一つ教えてあげるよ」
王子さまは立ち去り、再びバラたちを見に行った。
「君たちは、ぼくのバラに全然似てないよ。君たちはまだ何でもない。誰も君たちをなつかせたことはないし、君たちも誰かをなつかせたことがないでしょ。初めて会ったときのキツネみたいなものだ。最初は、ほかの何十万のキツネと同じでしかなかった。でも、ぼくたちは友だちになった。だから、あのキツネは、今では世界で１匹だけのキツネなんだ」

バラたちはとてもきまり悪そうだった。
王子さまは続けた。
「君たちは美しいよ。でも、中身は空っぽだ。君たちのために死ねる人なんかいない。もちろん、ぼくのバラだって通りすがりの人が見れば、君たちと同じ花だと思うだろう。でも、あのぼくのバラは１輪だけで、何百もいる君たち全部よりも大切なんだ。ぼくが水をやったのは、あのバラなんだもの。ぼくがガラスの覆いをかぶせたのも、あのバラなんだもの。ぼくがついたてを立てて風から守ったのも、あのバラなんだもの。毛虫を殺したのも（チョウチョになるのに２、３匹は残したけど）あの花のためなんだ。文句を言ったり自慢したり、時には黙りこんだりしたときにも、ぼくが耳を傾けてやったのも、あの花だからだ。だって、彼女はぼくのバラなんだから」

それから王子さまはキツネのところに戻った。
「さようなら」と、王子さまは言った。
「さようなら」、キツネが言った。
「じゃあ、秘密を教えるよ。とても簡単なことなんだけどね。ものごとは心で見なきゃ、ちゃんと見えないんだよ。いちばん大切なことは目には見えないんだ」
「いちばん大切なことは、目には見えない」、しっかり覚えておけるように王子さまは繰り返した。
「君のバラがとても大切なものになったのは、君がバラのために時間を費やしたからだ」
「ぼくがバラのために時間を費やしたから･･･」と、しっかり覚えておけるように王子さまは繰り返した。
「人間はこういう真理を忘れてしまっているんだ」キツネは言った。「でも、君は忘れちゃいけない。君がなつかせたものには、永遠に責任を持つんだ。君は、君のバラに、責任がある･･･」
「ぼくは、ぼくのバラに責任がある･･･」と、しっかり覚えておけるように、王子さまは繰り返した。

22

「こんにちは」、王子さまが言った。
「こんにちは」、線路のポイントを切りかえる鉄道員が言った。
「ここで何をしているの？」、王子さまが聞いた。
「乗客を千人ずつ仕分けている。その人たちを運ぶ列車を、右に、左に、送り出すんだ」
　そのとき、きらきらした明かりがついた特急列車が轟音をたてて走り去り、鉄道員の小屋が揺れた。
「すごく急いでいるんだね。あの人たち何を探しているの？」と、王子さまは言った。
「運転手も知らない」と、鉄道員が言った。
　すると、またきらきらした明かりがついた特急列車が轟音をたてて、今度は反対の方向に走っていった。
「もう戻ってきたの？」と、王子さまが聞いた。
「同じ列車じゃないんだ。すれちがったんだよ」と、鉄道員が答えた。
「自分がいるところに満足できなかったの？」と、王子さまが言った。
「人は自分がいるところにけっして満足できないんだよ」と、鉄道員が言った。
　すると、きらきらの明かりがついた三つ目の特急列車の轟音が聞こえた。
「最初のお客さんを追いかけているの？」と、王子さまは聞いた。
「何も追いかけてはいない」鉄道員が言った。「あの中で眠っているんだ。そうでなければ、あくびをしている。子どもたちだけが窓ガラスに顔をぎゅっと押しつけている」
「子どもだけが自分が何を探しているのかわかっているんだね」と、王子さまが言った。
「子どもはぬいぐるみの人形に時間を惜しまない。そうすると、その人形はとっても大切なものになる。だから取り上げられると泣くんだ･･･」
「子どもは幸運だなあ」と、鉄道員が言った。

23

「こんにちは」と、王子さまが言った。

「こんにちは」と、物売りが言った。

　物売りは、のどの渇きをいやすのに発明された薬を売っていた。週に 1 粒飲めば、何も飲みたくなくなるという薬だった。

「なぜそれを売っているの？」と、王子さまが聞いた。

「ものすごく時間を節約できるからだよ。専門家の計算によると、この薬を飲むと 1 週間に 53 分節約できる」

「で、その 53 分をどうするの？」

「したいことをするのさ・・・」

「53 分を好きに使えるなら、ぼくだったら、新鮮な水がある泉のほうへ、のんびり歩いていくんだけどなあ」と、王子さまは思った。

24

僕の飛行機が砂漠に不時着して８日目のことだった。物売りの話を聞きながら、僕は貯えの水の最後の一滴を飲み干した。

僕は王子さまに言った。

「ああ、君の思い出話はとてもおもしろいよ。でも、僕はまだ飛行機の修理ができていない。おまけに飲むものももうない。僕も新鮮な水がある泉に向かってのんびりと歩いていけたら、とてもうれしいんだけどなあ」

「ぼくの友だちのキツネはね･･･」と、王子さまが僕に言った。

「あのねえ、もうキツネにかかわっている場合じゃないんだ！」

「どうして？」

「のどが渇いて死にそうだから･･･」

王子さまは僕の言うことが飲みこめなくて、こう答えた。

「もうすぐ死ぬとしても、友だちがいたっていうのはいいものだよ。ぼくはキツネと友だちになれてとてもうれしい･･･」

「どれほど危険なことになっているのかわからないんだな」僕は思った。「きっとおなかもすかなければ、のども乾かないんだ。太陽の光が少しあれば十分なのだろう･･･」

しかし、王子さまは僕をじっと見つめて、僕の思ったことがわかったかのように答えた。

「ぼくものどが渇いたよ。井戸を探そう･･･」

僕はうんざりという身ぶりをした。果てしない砂漠の中でいきあたりばったりに井戸を探すなんて、ばかげていると思ったからだ。それでも僕たちは歩き出した。

何時間も黙って歩いていると、やがてあたりは暗くなり、星が光り始めた。のどが渇いて少し熱が出ていた僕は、星を見ながらまるで夢の中にいるようだった。王子さまが最後に言ったことが、頭の中でぐるぐる回っていた。

「じゃあ、君ものどが渇いているの？」

王子さまは答えなかった。ただこう言った。

「水は、心にも良いものかもしれないね･･･」

僕には意味がわからなかったが、何も言わなかった。王子さまにあれこれ聞いてもしかたがないとよくわかっていたからだ。王子さまは疲れて、座りこんだ。僕もそばに座った。しばらく沈黙の時がながれ、やがて王子さまはこう言った。

「星が美しいのは、目には見えない花が１輪咲いているからだよ」
「うん、そうだね」と、僕は答えた。そして何も言わずに、月の光に照らされて広がる砂の起伏を眺めていた。
「砂漠って、美しいね」と、王子さまがさらに言った。
　まったくそのとおりだった。僕はずっと砂漠が好きだった。なだらかな砂の上に座ると何も見えないし、何も聞こえないし、それでもその静けさの中で何かが脈うち、光を放っている･･･
「砂漠が美しいのは、どこかに一つ井戸をかくしているからだよ･･･」と、王子さまが言った。
　砂漠が不思議な光を放つわけが、突然わかって、僕は驚いた。僕は子どものころ、古い家に住んでいたのだが、その家のどこかに宝物が埋められているという言い伝えがあった。もちろん誰もそれを見つける方法を知らないし、それを探そうとした人もいなかったのだろう。でも、その宝物が家全体を魔法で包みこんでいた。僕の家は、目には見えないその奥底に、秘密を一つかくしていたのだ･･･
「そうだね」僕は王子さまに言った。「家も、星も、砂漠も美しいのは、目に見えないものがあるからだね！」
「君が、ぼくのキツネと同じことを言うなんてうれしいよ」と、王子さまが言った。
　それから王子さまが眠ってしまったので、僕は両腕で抱えてまた歩き出した。僕は心を強く揺さぶられていた。自分がこわれやすい宝物を抱えているような気がしていた。地球上に、これよりこわれやすいものは何もないと感じていた。僕は月の光の中で、その青白い顔を、その閉じた目を、風に揺れているその髪を見ていた。そしてこう思った。
「こうして目の前に見えているのは外側だけなんだ。いちばん大切なものは目には見えない･･･」
　王子さまの唇がわずかに開いて、少しほほえんでいるようだった。僕はさらに思った。
「こうして眠っている王子さまが、僕をこんなにも感動させるのは、王子さまに１輪の花への変わらない想いがあるからだ。眠っているときも、バラの姿が、ランプの炎のように王子さまの心の中で輝いているからなんだ･･･」
　そう思うと、王子さまがますますこわれやすいもののように感じられた。僕は王子さまを守らなきゃいけない、さっと風が吹くだけで消えてしまうランプの炎のようなものなのだから･･･
　そうして僕は歩き続け、夜明けに、井戸を見つけた。

25

王子さまは言った。

「人間って、特急列車に乗って出かけるのに、自分が何を探しているのかわかってないんだね。それでせわしなく動き回ったり、同じところをぐるぐる回ったりしている･･･」

さらにこう言った。

「そんなことしたって意味ないのに･･･」

僕たちがたどり着いた井戸は、サハラ砂漠にあるほかの井戸とは様子が違っていた。サハラ砂漠の井戸は砂を掘っただけのただの穴だ。僕たちが見つけた井戸は、村にあるような井戸だった。といっても、ここには村などない。僕は、夢を見ているのではないかと思った･･･

「不思議だね」僕は王子さまに言った。「全部使えるようになっている。滑車も桶も綱も･･･」

王子さまは笑って綱をつかみ、滑車を動かした。滑車はうめくような音をたてた。長いあいだ風に吹かれずにいた古い風見鶏のように。

「ほら、井戸が目を覚ましたよ。そして歌っているよ」と、王子さまが言った。

僕は王子さまに綱を持たせて疲れさせたくなかった。

「僕にまかせて。君には重すぎるよ」

僕はゆっくりと桶を井戸のふちまで引き上げて、そこにしっかりと置いた。疲れてはいたが、達成感を得ていい気分だった。滑車の歌がまだ耳の中で響いていた。静かに揺れている井戸水に、太陽の光が反射してきらめいていた。

「この水が飲みたかったんだ。ぼくに少し飲ませて･･･」と、王子さまは言った。

王子さまが何を探していたのかわかった。

僕は桶を王子さまの口元まで持っていった。王子さまは目をつぶって飲んだ。水はまるで特別な祝祭のごちそうのようにおいしかった。いつも飲んでいる水とはまったく別のものだった。星空の下を歩き、滑車の歌を聞き、僕の腕に力を入れてくみ上げた水だったからだ。それはプレゼントと同じように、心に良い水なのだ。子どものころ、クリスマスツリーに飾られたろうそくの光、真夜中のミサの音楽、みんなのやさしい笑顔が、僕がもらったプレゼントを光り輝かせていた。

「君が住んでいる星の人たちは、一つの庭に５千本もバラを植えているけど、自分が探しているものをその中に見つけていない」

「見つけていないね」と、僕は答えた。
「だけど、探しているものはたった１輪のバラや、ほんの少しの水の中に見つけることができるんだ」
「うん、本当だね」と、僕は答えた。
　王子さまは続けて言った。
「でも目には見えないんだ。心で探さないと･･･」
　僕は水を飲んだ。呼吸が楽になった。日が昇ると、砂は蜂蜜のような色になる。その輝くような色も、僕をいい気分にしてくれた。それなのに、なぜ僕はこんなに悲しい気持ちになっているのだろう。
「君は約束を守らなくちゃ」と、王子さまは静かに言って、また僕のそばに座った。
「どんな約束？」
「ほら･･･ぼくのヒツジにはめる口輪だよ･･･ぼくはあの花に責任があるんだから･･･」
　僕はポケットから大ざっぱな絵の下書きを取り出した。王子さまはそれを見ると笑いながらこう言った。
「君が描いたバオバブ、ちょっとキャベツみたいだね」
「ええ！」
　僕はバオバブの絵にはかなり自信があったのだ！
「君の描いたキツネ、耳がちょっとツノみたいだよ。長すぎるし」
　そう言って、王子さまはまた声を出して笑った。
「きびしいなあ、王子さまは。外側から見たボアと内側から見たボアしか僕は描けないんだから」
「うん、それでだいじょうぶ。子どもにはわかるから」
　そうして、僕は口輪を鉛筆で描いた。それを王子さまにわたすときには、胸が張り裂けるような気持ちになった。
「君は僕の知らないことをするつもりなんだね」
　だが、王子さまは答えなかった。代わりにこう言った。
「ねえ、ぼくは地球に降りてきたでしょ･･･明日でちょうど１年になるんだ」
　それからしばらく黙りこみ、王子さまはさらにこう言った。
「このすぐ近くに降りてきたんだよ」
　そして王子さまは顔を赤らめた。
　またしても、僕は、なぜだかわからないが、妙に悲しくなった。それでも、聞きたいことが頭に浮かんだ。
「じゃあ、偶然じゃなかったんだね？　１週間前の朝、僕が君と初めて会ったとき、君が人が住むところから千マイルも離れたところを、あんなふうにたった一人で歩い

ていたのは。降りてきた場所に戻るところだったんだね？」
　王子さまはまた顔を赤くした。
　ためらいながらも、僕はさらに言った。
「たぶん、１年目の記念日のためだったんだね？」
　王子さまはまた顔を赤くした。王子さまは質問には一度も答えてくれなかったが、顔を赤らめるのは、「うん」という意味なのだろう。
「ああ、なんだかこわいよ･･･」と、僕は王子さまに言った。
　だが、王子さまは僕の言葉をさえぎって、こう言った。
「君はまた仕事をしなきゃ。飛行機のところに戻らなきゃいけないよ。ぼくはここで待ってるよ。また来てね、明日の夕方･･･」
　それでも、僕は安心できなかった。キツネのことを思い出していたのだ。人は誰かになつかされてしまうと、少し泣いてしまうこともあるものなのだ･･･

26

井戸の横には崩れかけた古い石垣があった。次の日の夕方、僕が作業から戻ると、少し離れたところで王子さまがその石垣に座って、足をぶらぶらさせているのが見えた。それから王子さまの話し声が聞こえた。

「じゃあ、覚えていないんだね。正確にはここじゃないんだ」

相手が答えたにちがいない。王子さまがこう言い返したからだ。

「そうだよ、そうだよ！　今日だったんだ。でも場所はここじゃない」

僕は石垣のほうに歩き続けた。誰の姿も見えないし、声も聞こえなかった。だが、王子さまはまた答えていた。

「そのとおり。ぼくの足あとがどこから始まっているか、砂の中から見ればわかるでしょ。そこでぼくを待っててくれればいいんだ。今晩そこへ行くから」

石垣からほんの20メートルのところまで来ても、僕には何も見えなかった。

少し黙っていたあとで、王子さまがまた言った。

「君はいい毒を持っているんだよね？　ぼくを長い時間、苦しませたりしないよね？」

僕は胸がつぶれそうになって立ち止まった。しかし、まだ何もわからなかった。

「さあ、向こうへ行って。石垣から降りたいんだ」と、王子さまが言った。

僕は石垣の下に目をやって、跳び上がった。目の前には、30秒で死に至らせるあの黄色いヘビが1匹、王子さまのほうに鎌首を突き出していたのだ。僕はピストルを取り出そうと、ポケットの中を探りながら、走り出した。が、ヘビは僕の足音を聞くと、噴水の水が上がらなくなるときのように、すうっと砂の上をはっていった。そうして急ぐ様子もなく、かすかに金属みたいな音をたてて、石のあいだに消えていった。

僕は石垣にかけよった。いとおしい王子さまを抱きとめるのに、なんとか間に合った。王子さまの顔は、雪のように蒼白になっていた。

「これはどういうこと？　なぜヘビと話していたんだ？」

僕は、王子さまがいつも首に巻いている金色のスカーフを、ほどいてやった。そしてこめかみのあたりを湿らせて、水を少し飲ませた。すると、もう、何も問いただせなくなってしまった。王子さまは真剣なまなざしで僕を見つめると、両腕で僕の首に抱きついてきた。王子さまの心臓は、ライフル銃で撃たれて息絶えようとしている鳥の心臓のように、弱々しく鼓動を刻んでいた・・・

王子さまは言った。

「飛行機のこわれていたところがわかって、よかったね。これで、君はうちに帰れる

・・・」
「どうして知っているの？」
　僕は、思っていたよりもはるかに修理がうまくいったことを知らせようと思って、やって来たところだったのだ。
　王子さまは、僕の質問には答えずに、こう言った。
「ぼくも今日、うちに帰るんだ・・・」
　それから、悲しそうにこう続けた。
「でも君のところよりもずっと遠い・・・もっともっと難しい・・・」
　僕はとんでもないことが起きようとしているのだと、はっきり実感した。王子さまを幼い子どものように両腕でぎゅっと抱きしめていた。それでも、まるで底の見えない深い穴にまっさかさまに落ちていこうとしている王子さまを、僕には引き止めるすべがないように思えた・・・
　王子さまは、遠いところで道に迷った人のように、必死な顔をしていた。
「ぼくには君が描いてくれたヒツジがいる。ヒツジを入れる箱もある。口輪だってある・・・」
　そして、王子さまはさびしそうにほほえんだ。
　僕はずっとそのまま抱きしめていた。王子さまが少しずつ回復していくのが感じられた。
「ねえ、こわいんだね・・・」と、僕は王子さまに言った。
　王子さまがこわがっているのは間違いなかった。それでも、王子さまはちょっと声を出して笑った。
「今夜はもっとこわい思いをするんだ・・・」
　またしても、何か取り返しのつかないことが起きそうな気がして、僕は全身が凍りつきそうだった。王子さまの笑い声が二度と聞けなくなるのだと思うだけで耐えられそうになかった。僕にとってそれは砂漠の中の泉だったのだ。
「ねえ、僕は君が笑うのをまた聞きたいなあ」と、僕は言った。
　だが、王子さまは僕にこう言った。
「今夜で、１年なんだ・・・今夜、１年前に降りてきた場所の真上に、ぼくの星が来る・・・」
「ねえ、これは悪い夢なんだって言ってくれよ。ヘビのことや、待ち合わせ場所や、星のことも・・・」
　でも、王子さまは僕の願いには答えず、こう言った。
「大切なものは目には見えないんだ・・・」
「うん、そうだね・・・」
「花のことと同じだよ。もし君がどこかの星に咲いている１輪の花を愛していたら、

夜空を眺めると甘い気持ちになるよ。どの星にも花が咲いているように見えるから･･･」
「うん、そうだね･･･」
「水だって同じことだよ。滑車が歌って綱がきしんだおかげで、君がぼくに飲ませてくれた水は音楽みたいだった。ねえ、おぼえているでしょ、どんなにおいしい水だったか」
「うん、そうだね･･･」
「だから、夜になったら星を見上げてね。ぼくの星では、何もかもが小さすぎて、ぼくの星がどこにあるのか教えられないけど。でも、そのほうがいいんだ。ぼくの星は、君にとってたくさんある星のうちの一つになるから。そうしたら、君は夜空の星を全部見るのが好きになるでしょ･･･全部の星が君の友だちになるんだ。それからぼく、君にプレゼントをあげるね･･･」
　そう言って、王子さまは声をたてて笑った。
「ああ、王子さま、愛する王子さま、僕は君の笑い声を聞くのが大好きだ！」
「これがぼくのプレゼントだよ。本当にそうなんだ。これで、あの水を飲んだときと同じになる･･･」
「それ、どういうこと？」
「人はみんな星を持っている。でも人によって違うものなんだ。旅行する人にとって星はガイドになる。そうじゃない人にはただの小さな光だ。学者にとって星は研究するものだし、ぼくが出会った実業家にとって星は財産だった。でもどの星も何も言わないよ。君は、君だけが、ほかの誰も持っていない星を手に入れることになるんだ」
「それ、どういうこと？」
「どこかの星にぼくが住んでいる。どこかの星でぼくは笑っている。だから、夜に空を見上げると全部の星が笑っているように思える･･･君は、君だけが、笑う星を手に入れることになるんだよ！」
　そう言って、王子さまはまた声をたてて笑った。
「悲しい気持ちがやわらいだら（時がたつと悲しい気持ちはやわらぐものだよ）、君はぼくと知り合ってよかったと思うよ。君はずっとぼくの友だちなんだ。これからもぼくといっしょに笑いたくなるよ。だから、ときどき窓を開けていっしょに笑って、楽しいって思ってね･･･君が空を見上げて笑っているのを見て、君の友だちは驚くだろうね！　そしたら、こう言ってやるんだ。『そうなんだよ、星はいつも僕を笑わせてくれるんだ！』みんな君の頭がおかしくなったと思うだろうなあ。そしたら、ぼくは、君にひどいいたずらをしちゃったことになるね･･･」
　そして王子さまはまた声をたてて笑った。
「星の代わりに、笑える小さな鈴をたくさんあげたみたいになるね」

王子さまはまた声をたてて笑ったが、すぐに真剣な顔つきになって言った。
「今夜は、ね・・・来ちゃだめだよ」
「君のそばを離れないよ」と、僕は言った。
「ぼく、苦しんでいるみたいになるから。ちょっと死にかかっているみたいになるよ。うん、そうなんだ。だから見に来ないで。見るようなものじゃないよ・・・」
「君のそばを離れないよ」
王子さまは心配そうな顔をしていた。
「ぼくがこんなことを言うのは、ヘビもいるからだよ。君がかまれたらいけないし。ヘビっていじわるな生きものだから。おもしろがって君にかみつくかもしれないし・・・」
「僕は君のそばを離れないよ」
王子さまは、何か思いついて安心したようだった。
「2度目にかむときには、もう毒がないんだっけ」

その夜、王子さまが出かけたことに僕は気づかなかった。物音をまったくたてずに出て行ったからだ。なんとか追いつくと、王子さまは早足できっぱり覚悟を決めて歩いていた。僕を見るとただこう言った。
「ああ！　来ちゃったんだ・・・」
王子さまは僕の手を握った。僕のことをまだ心配していた。
「来ちゃだめだよ。つらい思いをするよ。ぼくは死んだみたいになるから。でもそうじゃないんだ・・・」
僕は黙っていた。
「ね・・・遠すぎるんだよ。ぼく、このからだを運んでいけないんだ。重すぎるんだもの」
僕は黙っていた。
「でも、そこらに放っておかれた抜けがらみたいなものだから。古い抜けがらなんて悲しくないでしょ・・・」
僕は黙っていた。
王子さまは少しくじけたが、さらにがんばってこう言った。
「ね、きっと楽しくなるよ。ぼくも星を見るよ。そしたら、全部の星がさびた滑車のついた井戸になるんだ。全部の星がぼくに新鮮な水を飲ませてくれるんだよ・・・」
僕は黙っていた。
「とっても楽しいに決まっているよ！　君には小さな5億もの鈴が、ぼくには5億もの小さな泉があるんだ・・・」
そこで王子さまも黙ってしまった。泣いていたのだ・・・

「ここだよ。ここからは、一人で行かせて」
　そう言って、王子さまは座りこんでしまった。こわかったのだ。それからまた話し出した。
「ねえ、ぼくの花・・・ぼくはあの花に責任があるんだ。それに、あの花、とても弱いんだよ！　何にも知らないし、身を守るのに四つしかトゲを持っていないし、そんなトゲ、なんの役にも立たないんだよ・・・」
　僕も座りこんだ。もう立っていられなかったのだ。
「ほら、もう、言うことはないよ・・・」
　それでも、王子さまは少しためらっていた。それから立ち上がって一歩踏み出した。僕は動くことができなかった。
　王子さまの足首の近くに、一筋の黄色い光だけがキラッと光った。王子さまは、ほんのちょっとのあいだ動かなかった。声も出さなかった。そして１本の木が倒れるように、ゆっくりと、くずれ落ちた。まったく音がしなかった。砂漠の砂の上だったから。

27

さて、あれからもう6年がたった･･･僕は、これまでこの話をしたことがない。無事に帰ってから会った友人たちは、僕が生きて帰ってきたことを喜んでくれた。僕は悲しかったのだが、みんなに「疲れているんだ」と言った。

今では悲しみは少しやわらいだ。つまり、完全になくなったわけではないということだ。でも、王子さまが自分の星に帰っていったことはわかっている。夜が明けると、王子さまのからだがどこにもなかったのだから。持っていけないほど重くはなかったのだ･･･僕は、夜に星の笑い声に耳を澄ますのが、好きになった。まるで5億もの小さな鈴が鳴っているみたいだ･･･

ところが、とんでもないことに気づいた･･･王子さまに描いた口輪に皮ひもをつけるのを忘れていたのだ。ヒツジに口輪をはめることはできなかっただろう。そういうわけで、僕は「王子さまの星では今ごろ何が起きているかな。ヒツジがあの花を食べてしまったかもしれないな･･･」などと思いつづけている。

また、こう思うときもある。「そんなことはないさ！　王子さまは毎晩ガラスの覆いをかぶせてやるのだし、ヒツジを厳重に見張っているだろう･･･」。すると、僕はうれしくなり、すべての星がやさしく笑いかけてくるのだ。

しかし、こう思うときもある。「何かの瞬間に人はうっかりするものだ。そしたら、それで終わりだ！　ある晩、王子さまがガラスの覆いをかぶせるのを忘れるか、夜中にヒツジがこっそり逃げ出すかも･･･」。すると、すべての小さな鈴が涙を流しているのだ･･･

ここには大いなる神秘がある。王子さまが大好きな君たちにとっても、僕にとっても、どこか知らないところで見たこともないヒツジが1輪のバラを食べてしまったかどうかで、世界のすべてが変わってしまうのだから･･･

空を見上げてごらん。そして「ヒツジはあの花を食べてしまったのか、それとも食べていないのか？」と、自分にたずねてごらん。すると、すべてがどれほど変わってしまうかわかるだろう･･･

でも、大人たちは誰も、これがどれほど大切なことなのか、けっしてわからないだろう！

これは僕にとって、この世でもっとも美しく、もっとも悲しい景色だ。前のページにあるのと同じだが、しっかりと記憶に残してもらいたいのでもう一度描いた。王子さまが地球に現れたのも、姿を消したのもここなのだ。

もし君たちがいつかアフリカの砂漠を旅することになったら、かならずここだとわかるように、しっかりと見ておいてほしい。そして、ここを通るときには、どうか急がないでほしい。あの星の真下でしばらく立ち止まってほしい。声をたてて笑い、金色の髪で、何をたずねても答えない子どもがやってきたら、君たちには、その子が誰だかわかるだろう。そうしたら、僕をなぐさめてほしい。手紙を書いてほしいのだ。王子さまが帰ってきたよ、と。